

に「ヤッコの裏の低い畑は聚樂第の外濠だ」と感嘆しながら袴の裾を左右からからげたものだ。何の爲にからげた裾だか知らないが、格別畑の中に飛込むでもなし、たゞ發見に満足した顔付で引上げられた。自來我等はこのオソリチーに従つて、聚樂第の外濠の跡だと来る人たちに紹介を怠らなかつた。豊公一代の豪華の跡をしのぶよすがには、好個とはいはないまでも、多少の形見たることはいふまでもない。ところでこの形見が今、目のあたり無残に亡びてゆく。この後「外濠の位置を基準にして何やらにおよぶ」といふやうな問題でKさんがやつて來ても、お氣の毒だがもう駄目だ、Kさんは兎も角として、僅に今日までこの記念を残しておいた太閤殿下に氣の毒でならぬ。

大概の名簿には自分の宿所は、丸太町千本西入新屋敷と記されて居る。新屋敷の名は今から二十年ばかり前までは、誰でも知つてゐたものなのだが、惜しいことに今は一丁東の交番で聞いても知らないさうだ。我輩は名所舊跡保存の考へで、いまだに宿所名簿の訂正を請求しない。所司代が巾をきかせた時代には、二條城をとりまいて幕府に屬する屋敷町があつたのだ（さうだ）が、その一つがこの新屋敷だ。何しろあばれものゝ巢窟だから、その名京洛に鳴りひびいたわけで、君の家の燈籠の下からどくろが出やしないかなどゝ出るにきまつたやうに聞く友人もある。出るか出ないか掘つて見るまでは分らないが、この頃まで以前の儘であつた近所の料理屋や、すつぽん屋などの、黒光りのした柱には、鈍刀らしいので切り込んだ痕の歴々として残つて居たのは確だ。種々雑多の亂暴狼藉は、今も口碑——といつても今では僕の老父の口碑ぐらゐるが唯一つのものだが——に残つてゐる。幕末當時の一種の舊跡たるを失はない。だがそんなことはすでに過去一場の夢で、普通りのだい塀の家などはもう一軒もない、我